

---

# 日本子ども社会学会 学会ニュース

第 10 号 (2003/10/15)

日本子ども社会学会事務局

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-19-1 九州大学教育学部地域教育社会学研究室気付

TEL&FAX:092-642-3124(住田研究室) TEL&FAX:092-642-3125(大学院生研究室)

E-mail jscs-edu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp URL <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jscs2/>

## 目次

第 11 回大会開催校について . . . . . 1	紀要編集委員会からのお知らせ . . . . . 11
第 11 回大会開催校から . . . . . 1	事務局からのお知らせ . . . . . 11
第 10 回大会報告 . . . . . 2	新入会員, 住所・所属等変更, 退会者 . . . . . 13
第 10 回大会総会報告 . . . . . 7	

## 第 11 回大会開催校について

第 10 回大会の総会で承認された通り、第 11 回大会は九州大学で行われることになりました。開催校の所在地、日程は下記の通りです。大会案内、大会事務局連絡先など、詳細は別途お知らせいたします。皆様のご参加、ご発表をお待ちしております。

開催校：九州大学 教育学部

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-19-1

日 程：2004 年 6 月 12 日(土)、13 日(日)

## 第 11 回大会開催校から

第 11 回大会準備委員長 住田正樹 (九州大学)

日本子ども社会学会第 11 回大会は、九州大学で開催することになりました。九州大学箱崎文系地区 (福岡市東区箱崎) の講義棟を会場として、平成 16 年 6 月 12 日 (土曜日)・13 日 (日曜日) の両日にわたって開催の予定です。近年は、6 月の第 4 週の土曜日・日曜日に開催することが多くなっていますが、第 11 回大会は開催日が 2 週間ほど早くなりますので、会員の皆様には早めに発表の準備をお願いいたします。

この箱崎文系地区は、数年後に大学移転を控えていますので施設・設備等も不備なままのところが多く、何かとご不便をおかけすると思いますが、ご容赦ください。

九州大学には、会員は教官 2 名、大学院生 6 名 (いずれも地域教育社会学研究室と教育人類学研究室) がいますが、さらに福岡県内の会員の方々にも協力をお願いして準備を進めていきたいと思っています。大会について何かご意見がありましたら、お寄せください。

多くの会員の方々のご発表、ご参加をお待ちしております。

---

---

## 第 10 回大会報告

### 1. 公開シンポジウム

#### 子どもの発達に異変は起こっているのか？

- 司 会 田中統治（筑波大学）  
原田 彰（呉大学）
- パネラー 家島 厚（茨城県立子ども福祉医療センター）  
深谷和子（東京成徳大学）  
岩立京子（東京学芸大学）
- 指定討論者 金井雅子（東京都児童相談センター）  
加野芳正（香川大学）

このシンポジウムでは、子どもの荒れを発達の遅れと乱れの問題と捉え、これを「異変」（私たち自身の育ち方からみたとき気になる変化）と見なせるかどうか、見なせるとすれば、それはどんな特徴をもっていて、どう対処すればよいかを論議した。

家島厚氏（茨城県立子ども福祉医療センター）は巡回指導を行ってきた小児科医の立場から、子どもが2年程度未熟になったと感じている保育士が多いこと、他人の感情に共感できない子どもが増加していること、その原因の一つにビデオ育児文化によって親子で視線を合わせる機会が乏しい点、また遊びの不足に起因する認知障害が急増している点などをあげられ、親子間を含むやりとり遊びの再興とその援助及びテレビオフタイムの導入を提案された。深谷和子氏（東京成徳大学）は、25年間に及ぶ相談室での心理臨床の経験をもとに、小学校高学年生の1割近くに見られる不適応が、生理的な変異、しつけと環境の変化、及び学校という装置の不具合の何れかに起因していると指摘され、以前なら修正可能であった仮性の異変が旧態依然とした学校との間でミスマッチを来しており、このため個に応ずる指導と環境および教師教育の充実が必要であると提案された。発達心理学者の岩立京子氏（東京学芸大学）は、保育者の2割が「落ち着きがない」などの情動調整に不安を感じている実態を示しながら、子どもの発達の变化を捉えるとき社会・文化的文脈に規定された枠組への気づき、生態学的な変数関係による理論構成と実証研究、及びこれをもとに直接・間接的な発達支援を重層化することが求められると強調された。

つぎに、指定討論者の金井雅子氏（東京都児童相談センター）は、子どもの発達に関わる問題が輻輳し主訴も複合化していること、子ども以上に保護者が変化していることを指摘され、これに対処する鍵は、関係機関が開かれたネットワークをどう築くことができるかであるとされた。また、加野芳正氏（香川大学）は、30年前から言われてきた「発達の異変」問題が社会によってつくられる側面を指摘され、異変の定義や ADHD や LD といったカテゴリ - の問題、心理学言説による社会の方向付けの問題などを提起された。

質疑では、「異変」の有無とその捉え方をめぐる問題、親の自己実現を含む子育て支援の「深さ」の問題、遊びを媒介とした援助態勢やインクルーシブな学校や社会のあり方などが議論された。その成果として、当学会が専門家の育成と子どもの成長環境の保障に果たす役割の重要性が再確認されたことが大きい。また、会員以外の参加者が50名に達したこともこのテーマへの関心の強さを物語っており、続編の企画を期待したい。

（筑波大学 田中統治）

---

---

## 2. ワークショップ

### ワークショップ1

#### 「日本子ども社会学会・会員調査」報告

コーディネーター 武内 清（上智大学）  
発表者 中田周作（広島国際大学）  
小針 誠（日本学術振興会特別研究員）  
浜島幸司（上智大学大学院）

日本子ども社会学会は、10年間の草創期を経て、次の時代・発展段階に入りつつある。これまでも学問的方向性や研究対象・方法論をめぐってさまざまな模索がなされてきた。2002年秋に、「将来構想委員会」のもとで組織された「調査専門委員会」で、これからの本学会のあり方を検討するための資料を得る目的で、「日本子ども社会学会・会員調査」を実施した。その結果を報告し、議論を深めたのが本ワークショップである。

はじめに、武内が調査の意図・目的と回収結果の特質について報告し、小針が会員の研究分野・研究動向について報告し、浜島が学会大会への参加、大会への評価について報告し、最後に中田が大会運営・事務局への要望について報告した。

次のようなことが主に指摘された。多彩なアプローチができるのが本学会の研究方法の特質であるが、レベルの向上が課題となっている。会員の属性によって、大会への参加や発表回数に差があり、大会運営への評価も分かれている。会員の多様なニーズを汲み入れた大会運営が望まれる。学会の役職者が一部の専攻に偏っているのではないかという批判がある。しかし役員のボランティアの努力も評価されるべきである。

以上の報告を受け、内容に関する質疑応答と草創期を知るフロアからのコメントがなされ、本学会が直面し、克服していかなければならない課題が多く議論された。本学会が「第1の学会」になりえていないことをどのように捉えるべきか？ 紀要に特集を設けるべきではないのか？ 現場（幼稚園・保育園・小中高）の人の参加を増やすのには何をなすべきかなどが議論された。

当日の参加人数は少なく、多くの会員の意見を聞くことができなかったのは残念であった。しかし、節目の10年を迎え、本学会のさらなる発展を目指していく上で、今回の会員調査のから得られたデータの考察は、さらに必要であろう。（『日本子ども社会学会・会員調査・報告書』の必要な方はご連絡いただきたい。学会ホームページにも報告書の内容を掲載している）

（上智大学 武内 清）

### ワークショップ2

#### 幼稚園における幼児の遊びの集団性と個のかかわり 遊びの実践と研究をめぐって

企画者 小川博久（日本女子大学）  
岩田遵子（県立新潟女子短期大学）  
司会 小川博久（日本女子大学）  
話題提供者 早野和美（小田原市立前羽幼稚園）  
岩田遵子（県立新潟女子短期大学）  
岡 健（大妻女子大学）  
小川哲男（昭和女子大学短期大学部）  
杉山哲司（日本女子大学）

---

---

指定討論者 河邊貴子（立教女子短期大学）  
久保寺節子（港区立麻布幼稚園）

本ワークショップの開催にあたっては、50人定員の教室にほぼ満員の参加者があり、活発な話し合いが行われた。企画者の立場として、参加者に感謝の意を表したい。ワークショップは、企画者で司会者でもある小川が、討論参加者としてこの研究会のメンバーと現場の実践者を、また、指定討論者として現場に詳しい研究者と大学院で保育研究を修めた現場保育者を紹介し、小川の作成した討議資料を配付した上で始まった。まず、この研究の動機と目的を説明し、企画者の一人である岩田がフィールドワークで撮影した小田原市立前羽幼稚園の実践の映像記録（約3時間）を25分弱に編集したビデオを、岩田自身の解説を交えながら上映した。このビデオ視聴の後、研究同人である岡は遊びという観点から、小川（哲）は小学校の総合学習との対比から、杉山は専門の運動心理の面から、各自短いコメントを出した。また、早野は、保育実践者の立場から自己の実践的幼児理解の変化などについて、前園長の窪田は、この幼稚園の実践方針の展開と保育の実態について説明した。

その後、指定討論者からは、映像に映った保育の実態等についての質問が出された。また、フロアからも活発な討論と質疑応答が展開された。その点では、企画側としては満足しているが、討論の中味としては論争点が明らかではなく、企画者のねらいや方法が十分に理解され、それをめぐってかみ合った議論が展開されたとは言い難い。その理由としては、企画者小川の配布した討議資料の内容についての質疑が皆無で、ビデオ映像のあり方や作り方に議論がほとんど集中してしまったことにある。その焦点は、映像記録が個と集団の関係を示すものになっていないという点であった。実践に詳しい研究者からは、保育はいいけれど、研究の仕方については問題があるなどといった、われわれの研究姿勢に対する理解が全く得られない反応が見られ、ビデオ記録による討論の難しさが痛感された。今後、新たな形でこの課題に挑戦したい。

（日本女子大学 小川博久）

### 3. ラウンドテーブル

#### ラウンドテーブル1

これからの子ども社会研究をどうすすめるか？（その2）

- 21世紀の子ども社会研究の方法を探る -

コーディネーター 望月重信（明治学院大学）  
話題提供者 持田良和（龍谷大学）  
山田富秋（京都精華大学）  
馬居政幸（静岡大学）

ほぼ、70余名の会員の参加によるラウンドテーブルは成功したのかしなかったのか？時間がなく十分な議論ができなかったという点で不成功。フロアの会員の真剣な「まなざし」が会場の緊張をかもしだし、標記のテーブルの関心の高さを示していると認識できたという点から成功である。

それにしても話題提供者の視点の相違がシビアに表われ、フロアからの質問や意見にも「子ども研究」のそれぞれの「思い」や「姿勢」が如実に顕れたラウンドテーブルであったといえる。

まず、山田富秋氏は、「子ども」というカテゴリーが社会文化的な構築物だ、ということを前面に出す。子どもの視点に立って、子どもが生活している世界にいかにかアプローチするか。そこで提唱される

---

---

研究方法は、大人が生活している社会を自明視するのではない、パラダイムとしてエスノグラフィックなフィールドワークであると強調した。

持田良和氏は、子どもの社会研究における社会学の位置に注目し、子どもの現状把握への事実認識の提供が一方であり、他方で多角的視点の提供も重要視する。後者は「社会学感覚」こそ前提と力説する。動機ともいえる「感覚」を提示したのは、恐らく「科学的手続き」(精緻な概念定義・厳密な数学的処理といった)の圧倒による、子どもの現実構成の不可視化を批判していることによる。概念の一人歩きを戒め、イメージの「妥当性」に反省的に検証することを提起した。

馬居政幸氏は、子ども社会研究の方法に三つの問題を提起した。子どもとはだれのことか(対象の問題)、どこで生まれ育った子どもなのか(方法の問題)、子どもと共に生きるのはだれか(認識主体の問題)。そして、子ども社会の「居場所」が議論になるのは、子どもを育てる人間形成空間のくずれを象徴していること、20世紀の子ども社会には見られなかった現象(例えば引きこもり)をどう考えたらよいかと問う。大人には絶対踏み込めない、理解できない、子どもにはスンナリと心に入る世界(例えば少年ジャンプの世界)が存在することを力説した。

話題提供としては余りにも重い。フロアからの発言を取り上げるのに紙数は尽きている。ただ共通認識としていえることは、単に科学でとらえられるという研究者のおごりを戒めること、無理に~学で子どもを見れば子どもが見えなくなる、ということだろう。

(明治学院大学 望月重信)

## ラウンドテーブル2

### 子どものセクシュアリティ(その3)

コーディネーター	岸澤初美(川崎市立看護短期大学) 近藤 弘(立教大学)
話題提供者	小宮明彦(早稲田大学大学院) 品川ひろみ(北海道大学大学院)

まず、司会の岸澤氏より、これまで子どものセクシュアリティをめぐって、児童文学、セクシュアルハラスメント、性的マイノリティ等をあげてきたこと、そのなかでジェンダー研究のなかでどう子どものセクシュアリティを位置づけるかが課題となっているとの指摘があり、今回は外国の事例および母親たちの子どものセクシュアリティに関する意識調査の結果を報告してもらいながら、この課題に取り組みたいとの話があった。

最初に、小宮氏より、イギリスでの1年間の在外研究をふまえて、イギリス(ロンドン)におけるゲイ・リベレーションとエイズとの関わり、それと関連して当時のサッチャー政権が出してきたエイズ防止を同性愛防止に結びつけて規制しようとした「セクション28」に対する学生たちの反対運動の動き、それと対比した日本におけるエイズ問題と同性愛の関係についての報告があった。特に日本の場合、外国籍の人と同性愛者の感染率が高い点が指摘され、そうした人々に対する支援の必要性を指摘された。

続いて、品川氏より、子育てサークルに集まる母親のインタビュー調査に基づき、親の性別による子どもの性の受け止め方、子どもの性自認は生殖器の違いからくるのではないか、セクシュアリティは発達するものか、性被害の対象になりやすい女性を意識する言動、ジェンダーとセクシュアリティの関係等についての報告があった。

この2つの報告をふまえ、岸澤氏の司会により、議論に入った。特に、品川氏の報告にあった女性の性器の名称をどう考えるか、男の子の性器を巡って、特に包茎に対してどう対処したらいいかわからないという母親の発言に関して、小宮氏より日本の男性向け週刊誌に多く掲載されている「包茎手術」の広告の問題点などが指摘された。また、子どもの性に関して夫婦間でやりとりしているの

---

---

かという指摘もなされた。かなり具体的な話も出され、あらためて子どものセクシュアリティは奥が深いという認識を持った。残念ながら、参加者は少なかったが、それだけに密度の濃い議論が出来たと思われる。

(立教大学 近藤 弘)

### ラウンドテーブル3

#### 紙芝居の展示と保存

コーディネーター 堀田 穰(京都学園大学)

年に一度、学会という場所に集まって、紙芝居についての研究発表を行ったり、それを聞いたり、また、実演家がじっさいに上演して見せ、紙芝居にかかわるものたちが情報交換したりするきっかけを作りたいと思って昨年からささやかに始めている。ゆくゆくは紙芝居所蔵諸施設、機関の実務的な連絡会議なども実現できたらと考えている。この学会が研究者ばかりでなく実践者にも開かれた学会であることに資したいと思う。

主なラウンドテーブル参加者

石山幸弘氏 群馬県立土屋文明記念文学館学芸員  
小川由美氏 ふくやま文学館学芸員  
平形建一氏 富士大学講師、宮城県図書館元司書  
鈴木常勝氏 紙芝居博物館、三邑会会員、大阪市立大学大学院生  
加藤武郎氏 童心社顧問、『平和のちかい』上演  
鈴木孝子氏 子どもの文化研究所、『子どもの文化』編集部  
渡辺享子氏 紙芝居作家、五山賞受賞者  
信澤淳一氏 紙芝居かかん倶楽部、『モチモチの木』上演  
水出真弓氏 紙芝居かかん倶楽部  
水出千尋氏 紙芝居かかん倶楽部  
杉山尚輝氏 すずなり座、子ども社会学会会員、『武庫の渡し』上演  
横山健児氏ご夫妻 水戸市在住、コレクション、紙芝居舞台、街頭紙芝居など

なお、社会学会の一般参加者の方も多数参加いただいた。コーディネーターが本務校の仕事で日曜しか参加できないという無理を大会実行委員会に聞いていただき、そのため、時間設定が短くなり参加者に惜しまれた。展示車は実現しなかったが横山氏はそのコレクションの一部を持参されて、見る事ができた。すべて至らないのはコーディネーターの責任であり、大会実行委員会の皆様には誠に感謝している。

(京都学園大学 堀田 穰)

#### 4. 第10回大会を終えて

記念すべき第10回大会を無事に終えまして、ご協力いただきました会員の方々に厚くお礼を申し上げます。お蔭様で、発表は53件に達し、また参加者も計195名(うち会員159名、当日会員36名)のぼりました。さらに懇親会も79名が出席され、アカペラの歌声などで盛り上がりました。前回の岡山大会とほぼ同規模で大会を開催できましたことに安堵しております。ただ、冷房は期間外ということで入れることができず大変不自由をおかけしました。その他、何かと不行き届きの点がありましたことをお詫び致します。この時期としては天候に恵まれて比較的、涼しかったことが救いでした。

この間、学期末の忙しい時期に、飯田浩之先生をはじめ教官と院生の皆さんには献身的な準備作業をこなしていただきました。本大会はこうした「裏方の仕事」に支えられて成功することができまし

---

た。また、司会の労をとっていただいた会員の先生方にはご無理をお願いしたにもかかわらず、ご快諾をいただき、各部会の討論を充実させていただきました。この場を借りましてあらためて謝意を表したいと存じます。

公開シンポジウムの方は第2日目の午後という日程のためか、会員の居残り率がやや低かったようです。しかし、会員以外の学生や市民の方々(約50名)が参加していただき、多数の質問を寄せてくださいました。討論の時間が短かく、フロア - とのやり取りまで十分できませんでしたが、子どもの発達を促すために必要な社会環境のあり方を幅広く検討することができました。これも提案者と討論者をお引き受けいただいた皆様のご尽力の賜物です。今後、この問題が継続して追究されることを期待しております。以上、大会校を代表しまして報告とお礼を申し上げます。

(筑波大学 田中統治)

## 第10回大会総会報告

### 1. 報告事項

#### (1) 2002年度事業報告

第9回大会の開催	2002年6月22日(土)~23日(日) 於:岡山大学
理事会の開催	2002年6月21日(金) 於:岡山カルチャーホテル会議室
常任理事会の開催	2002年12月7日(土) 於:キャンパスプラザ京都
	2003年3月29日(土) 於:龍谷大学大宮学舎
評議会の開催	2002年6月23日(日) 於:岡山大学
各種委員会の開催	2002年6月23日(日) 於:岡山大学
紀要編集委員会の開催	2002年10月6日(日) 於:大阪大学
	2002年12月7日(土) 於:キャンパスプラザ京都
研究交流委員会主催	第1回子ども社会学会関東地区研究会を開催
	2002年10月5日(土) 於:明治学院大学
	第2回子ども社会学会関東地区研究会を開催
	2003年5月31日(土) 於:上智大学
選挙管理委員会の開催	2003年2月23日(日) 理事選挙開票
	於:龍谷大学大宮学舎
	2003年3月6日(日) 会長選挙開票
	於:ホテル京阪京都
事務局活動	2002年10月1日(火) 「学会ニュース」第9号発行
	2003年2月4日(火) 理事選挙投票用紙発送
	2003年3月4日(火) 第10回大会案内送付
	2003年3月4日(火) 会長選挙投票用紙発送
	2003年6月4日(水) 第10回大会プログラム発送

会員数(2003年6月21日現在)

正会員	514名
学生会員	89名
賛助会員	3名
全会員数	606名

2002年度分学会費納入状況(2003年6月21日現在)

正会員	514名中	439名(85.4%)
学生会員	89名中	89名(100.0%)
賛助会員	3名中	1名(33.3%)
全会員数	606名中	529名(87.3%)

- 
- ( 2 ) 選挙管理委員会報告
  - ( 3 ) 紀要編集委員会報告
  - ( 4 ) 研究交流委員会報告
  - ( 5 ) メディア活用委員会報告
  - ( 6 ) 将来構想委員会報告
  - ( 7 ) その他

## 2 . 審議事項

- ( 1 ) 平成 15・16 年度理事の選出及び会長の選出について
  - ( 2 ) 推薦理事及び常任理事の推薦について
  - ( 3 ) 監査の推薦について
  - ( 4 ) 事務局長の推薦について
  - ( 5 ) 評議員の推薦について
  - ( 6 ) 2002 年度決算について
  - ( 7 ) 2002 年度会計監査について
  - ( 8 ) 2003 年度予算案について
  - ( 9 ) 第 11 回大会開催校及び開催日について
  - ( 10 ) その他
-

---

## 紀要編集委員会からのお知らせ

平成 15・16 年度の委員会が新しいメンバーも加えて発足しました。これからよろしく願いいたします。さて、大会時の新委員会の場で、第 10 号を記念号として企画する案が出されました。十分に審議する時間はありませんでしたが、理事の皆様からも賛同が寄せられましたので、一応、つぎのような企画で第 10 号を編集することにいたしますので、お知らせ申し上げます。

誌上シンポジウム：「子ども社会研究の可能性」

内容：子ども社会研究に期待されるこれからの研究課題を中心にできるだけ多くの分野の方から、これから本学会が目指すべき方向を提案いただく。

寄稿依頼：6 名までを限度に、400 字 × 20 枚程度でお願いする。

執筆者案については、委員会で検討する。

この記念号を編集する上で、投稿掲載論文と書評の本数を減らすことは行わず、研究情報を割愛します。このため、頁数は増えますが、その財源については、理事会の承認をえることにします。多数のご投稿をお待ちいたします。

(筑波大学 田中統治)

## 事務局からのお知らせ

### (1) 学会費納入

本年度(平成 15 年度)の学会費未納の方は、郵便振替にてお納めください。学会費を滞納されますと会員資格が失われます。口座番号等は次のとおりです。なお、通信欄には必ず何年度の学会費かをご記入ください。

口座番号	01760-1-85048
加入者名	日本子ども社会学会

### (2) 会費

平成 13 年度より会費が値上げされています。学会費振込みの際はご注意ください。

平成 12 年度以前	正会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、団体会員 10,000 円
平成 13 年度以降	正会員 7,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 10,000 円

### (3) 学会入会手続き

本学会へ入会を希望される方は、学会事務局(住所は 1 頁参照)まで、切手を添付した返信用封筒を同封の上、ご連絡ください。事務局より入会案内書をお送りいたします。入会される場合、入会申込書に必要事項を記入の上(現学会員の推薦が必要)会費を郵便振替にて納入してください。

### (4) 住所・所属等の変更

住所、所属、電話番号等に変更があった場合、必ず学会事務局へお知らせください。これらの変更は『学会ニュース』にてお知らせいたします。また、退会される方も、必ず学会事務局へお知らせください。いずれの場合も、電話ではなく葉書や FAX、E-mail 等の書面にてお願いします。

---

(5) 献本

- 白井慎監修『子どもの豊かな育ちと地域支援』学文社 2002年  
住田正樹・南博文編『子どもたちの『居場所』と対人的世界の現在』九州大学出版会、2003年  
竹内オサム『マンガの批評と研究+資料』2003年  
中川香子『もう一人では生きていかない』新曜社、2003年  
原田彰編著『学力問題へのアプローチ - マイノリティと階層の視点から - 』多賀出版、2003年  
原田彰『教師論の現在 - 文芸からみた子どもと教師 - 』北大路書房、2003年  
兵庫教育大学学校教育研究会編『教育研究論叢』第4号、2002年  
『子どもと広告 2』『少年時代』古群洞、2002・2003年  
『アジア太平洋フォーラム・淡路会議 2002』アジア太平洋フォーラム淡路会議事務局、2003年  
『見過ごさないで、子どもたちのSOS』学習研究社、2003年

(6) 財団法人日本科学協会より、研究助成募集の案内が届きました。ホームページをご参照の上  
(<http://www.jss.or.jp>) ふるってご応募ください。

平成15年度笹川科学研究助成 募集期間：2003年9月2日～10月15日  
問い合わせ先 財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成係  
〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル5F  
TEL 03-6229-5365 FAX 03-6229-5369  
E-mail [jss@silver.ocn.ne.jp](mailto:jss@silver.ocn.ne.jp) URL <http://www.jss.or.jp>

(7) 社団法人青少年交友協会より、国際会議の案内が届きました。ふるってご参加ください。

第7回野外伝承遊び国際会議 - 野外伝承遊びの意義と現状 -  
期間 平成15年11月1日(土)～3日(月)  
会場 国立オリンピック記念青少年総合センター  
問い合わせ先 社団法人青少年交友協会  
〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第7麹町ビル56  
TEL 03-3262-7471 FAX 03-3262-7472  
E-mail [kouyuu@din.or.jp](mailto:kouyuu@din.or.jp)

- 事務局から -

事務局では『大会プログラム』に掲載する広告を募集しています。広告掲載を希望する出版社等をご存知でしたら、ご紹介ください。

日本子ども社会学会 事務局  
〒812-8581  
福岡市東区箱崎6-19-1  
九州大学教育学部  
地域教育社会学研究室 気付  
Tel&Fax 092-642-3124 (住田研究室)  
Tel&Fax 092-642-3125 (院生研究室)

---

新入会員

(略)

退会者

(略)

住所・所属等変更

(略)

---